

# 日本の古建築 — 高欄

30期生

## I テーマ設定の理由

僕らが一年のときには、日本の古建築の門の研究をした。それは、これから三年間、ずっと日本の古建築について調べてゆこう、ということでやりはじめたものである。従って今年はその第二弾ということになる。なぜこんなものを調べようとしたかといえば、その意匠(デザイン)の細かく規則正しいこと、屋根の線の美しいことなどをなんとなく感じていたからで、その気持は去年の研究で明確になった。正直なところ、今年はその中の何にするか迷った。しかし、長町先生の助言があったこと、建物の外側のよく見えるところにあり種々の形があること、などが相まって、結局は高欄(手すり)を調べることになった。

## II 研究方法

本を読んで、かたち、位置などに関する知識をある程度身につける。このあと、図書館の本、観光地図、親の話などから、どういうところへ行くか決め、実際に行く。そして、昨年もお世話になった東福寺三門修理事務所の方にお話をきき、そのあとでもう一度本を見てまとめる。—これが計画である。実際ともそれほど変わっていないが、東福寺三門修理事務所の方にうかがったお話は、今回の研究に関係のないことも多かった。そのこともぜひとも書きたいが、これは総括のところを書くこととしよう。

### ○行った所は

- 第一回 南禅寺(京都東山 三門の上へのぼる)→知恩院(京都東山 できる限り下からながめる)→東福寺(京都東山 上記の方にお話をきく)
- 第二回 大徳寺(京都洛中 修理事務所の方にお話をきく)→仁和寺(京都洛西 高欄のある建物を見て回る)→妙心寺(京都洛西 仁和寺と同じ方法)でいずれも京都の寺である。

### ○資料の入手は

大徳寺の項にある、「修理事務所の方」というのは、東福寺の三門修理事務所の方に紹介していただいた人である。両方の方々に度々手紙で質問したが、どちらの方も親切にこたえてくださり、新たにいろいろなことがわかった。大徳寺の方は、十枚を超えるコピー、説明などの資料を送ってくださった。前述の、本を見てまとめる、ことのはかにも、このようにして資料が続々と集まった。

### ○参考文献は

古建築の細部意匠(大河出版 近藤豊著)が主で、文化財のはなし(奈良県教育委員会発行)

京都古寺巡礼(教養文庫 川勝政太郎著)などである。

## III 研究結果

高欄というのは、古建築物(江戸以前のをさす)についているものである。—こんな説明でわかる人がいるはずはないが、まさにそのとおりである。高欄などというイカメシイ名前なのでわかりにくいのかも知れないが、いってみれば手摺のことである。建て物にそれがつけられた理由として、①建築物からの人の転落を防ぐという安全上の目的と、②それによって建築物全体をひきしめるという意匠(デザイン)上の目的とがあげられる。次にどこにつけるかである。図1を見てもらえばわかるが、多分、だれでも一回は見たことがあるはずである。どこかの寺の塔であるとか、御江戸日本橋・京の五条の橋の上…の絵などには必ず、この「高欄」があったはずだ。ともかく、僕の図はあまりうまくないの

図1. 高欄はどこにある?

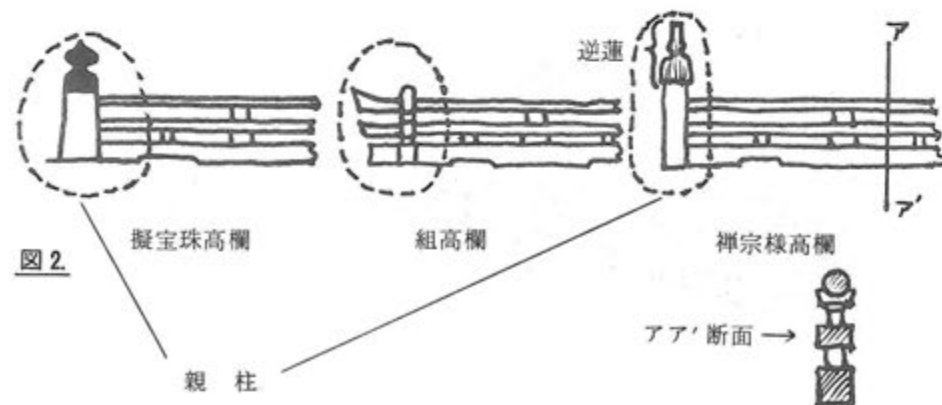


で、みんなが普段、どれだけ注意して古建築をみているかどうかでその理解度は決まる。

### (1) 高欄の種類

高欄の種類分けは、簡素なもの、特殊な形のもの、組高欄・擬宝珠高欄・禅宗様高欄、というように、大ざっぱに分けると三つである。前者二つは一般家屋、書院、茶室などについている、いわゆる手摺で、簡素か、非常にこっているかのどちらかだが、後者の三つ組になっているものは、みんなが社寺でよく見かけるはずのものである。この三つ組になっているものは、日本古建築の建築様式のいくつかに直接結びついていて、遺例が数知れない。そこで僕らは、この最後の三つ組になっているものについて調べた。

### (2) 組高欄・擬宝珠高欄・禅宗様高欄



前ページ下に示した図は、名種高欄の隅または端における形状をあらわしており、破線の丸で囲んだ部分は、高欄が互いに交わったり（組高欄）、親柱（擬宝珠高欄と禪宗様高欄にある）がたっていて、そこで高欄がおわっていたりすることを示している。

(1) 組高欄

隅や端で各水平材が互いに組まれてはね出している形式。日本での最古の例は、法隆寺金堂などにみられる、飛鳥様式と呼ばれるもので、図に示した組高欄とは感じがかなりちがう。調べたところによると、上記三形式の中ではいちばん古いようだ。

(2) 擬宝珠高欄

隅角などで擬宝珠（たまねぎのような形をしたもの）が先端についた親柱を立てたもので、この柱を宝珠柱ともいう。この擬宝珠も種々雑多なものがあるが、まだほとんど調べていないので触れない。しかし、唐招提寺には、擬宝珠が鉄でできておらず木目があり、特殊な雰囲気がかもし出されているものがある。なお、大陸からこの方式が伝わったのは、平安後期から鎌倉初期あたりらしい。組高欄におくれること500年である。

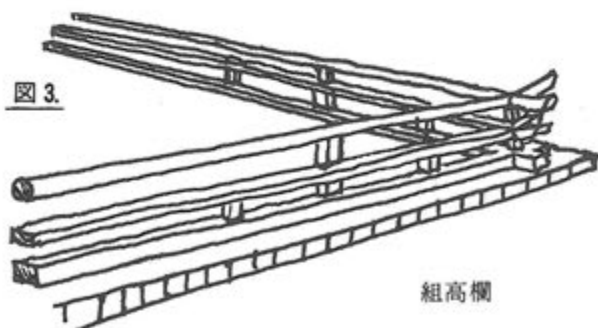
(3) 禪宗様高欄

その名のとおり、鎌倉以後禪宗と時期を同じくして入ってきた建築様式である。禪宗寺院の建築は、質素で直線的、ズバズバして豪快、なのかと思っていたら、そうではなく、細かな所にまでこっている。屋根の肩が張っていて豪快なのは確かだ。話がすこしそれてしまった。ともかく、上記二形式とのちがいは、細かな彫刻のほどこされていることが多いということである。図2に示したように、親柱の先に怪しげな物がついている。（で示した所だ。これは、逆運さかるとんといって運はすを逆さにしたものの形を表している。近よって見ると、本当に花びらが下を向いているように彫られている。擬宝珠を知っている人はかなりいると思うが、この逆運柱（逆運のついた親柱）を知っている人は皆無にちがいない。ところで、宝珠柱の断面は円形であるが、逆運柱はそうとは限らず、僕らが見たものは、後世出てきた方形断面のものばかりである。

下に、組高欄の水平材が互いに組まれているところをよくわかるようにしたつもりだが、果して実感

が出てくるかどうか。

図 3.



組高欄

[3] 各寺院・各建築における高欄の種類

下は、僕らが見て回った寺、その他の建築についている高欄の種類である。

（略号：組高欄→ク、擬宝珠高欄→ギ、禪宗様高欄→ゼ）

○大徳寺三門	禪宗	ゼ	京都	○三条大橋	—	ギ	京都
○知恩院三門	浄土宗	ゼ	〃	○興福寺之塔	不明	ク	奈良
○八坂神社楼門	—	ク	〃	○薬師寺之塔	不明	ク	〃
○清水寺楼門	不明	ク	〃	○東大寺中門	不明	ク	〃
○〃 舞台	〃	ギ	〃	○唐招提寺舍利殿	不明	ギ	〃
○東福寺三門	禪宗	ゼ	〃	○〃 礼堂東室	不明	ギ	〃
○大徳寺三門	禪宗	ゼ	〃	○法隆寺中門	不明	ク	〃
○妙心寺三門	禪宗	ゼ	〃	○〃 金堂	不明	ク	〃
○仁和寺三門	真言宗	ク	〃	○〃 塔	不明	ク	〃
○〃 塔	〃	ク	〃				
○〃 金堂	〃	ギ	〃				

上記事項内、不明のものは、絶対に禪宗でないことは明確。

Ⅳ 結 論

禪宗様高欄は、禪宗寺院以外には、例外的な場合を除いて使われていないということ。（例外というのは、知恩院三門で、これは、もともと寺院建築ではなく、城郭的な性格の強いもので、権威をあらわすものであったからである。）

これ以外に結論はない。現在も結論を出すための途中の段階であるためだ。

Ⅴ 総 括

結論を出す途中の段階だとかいたが、まさにそのとおりである。いったいどこに結論をもってゆけばいいのかわからないが、ともすれば無味乾燥になり勝ちな現代の建築に、なんとか美しい古建築のよさを加えられないかということを考え、その結論を出すつもりだ。いつになるのかわからない。従って、今までやった二年間の研究も、ほんのかけらにすぎない。東福寺三門修理事務所の方にかがったお話も、高欄だけを調べるのならそれだけでよいが、全部を順々に学ぶのならば、門の次に高欄、という順はおかしい、というアドバイスであった。

何日か前、唐招提寺に行ってきた。歩いて20分ほどの所だ。じっと金堂をながめていると、その大らかな屋根の線に、何度も深呼吸をせずにはいられなくなった。修学旅行生や団体の消えたあとの、ひっそりとした夕ぐれだ。気持ちよかった。— もし、僕らのこの研究を見て興味をもった人はどうするであろうか。古建築が見えてくるなりかけ寄って、これは〇〇高欄だ、などと心の中でさけぶだろう。僕らもそんなふうな、自分が知識を持ったことに、誇りを感じて、自分でそれを証明しては喜んだ。しかし、遠くから、松並木の向こうに、せみしぐれの奥に、夕焼けの中にかびあがる古建築の美しさをよく味わうことが本当は大切なのだ、ということをお近藤豊氏は書いておられた。僕らも心がけねば。